中学生の抑うつ傾向と過剰適応

―学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて―

石　津　憲一郎*
安　保　英　勇**

本研究の目的は中学生の抑うつ傾向に対する追試的調査及び、抑うつ傾向と関連する要因の検討であった。追試的調査から、中学生の20.1％が抑うつ得点のカットオフスコア以上であり、先行研究同様に日本の中学生における抑うつ傾向が高いレベルにあることが示された。また、学年があがるにつれ抑うつ傾向得点は増加することが示された。続いて、抑うつ傾向と関連すると考えられる要因として個人の過剰適応傾向を設定し、抑うつ傾向との関連性を検討した。その結果、過剰適応の下位尺度と抑うつ傾向との間には正の相関が見られることが示された。また、学校適応に関する保護者評定と自己評定のズレと抑うつ傾向との関連を検討したところ、特に友人領域において、保護者評定による適応は高くても自己評定が低い場合、子どもは抑うつ得点が高くなることが示された。以上の結果から、子どもが過剰適応的に振舞うことによって客観的な適応（外的適応）と個人の苦悩とが乖離していく可能性について考察した。

キーワード：過剰適応、抑うつ傾向、中学生、学校適応

問題と目的

思春期は第二の分離個体化の時期とも言われ、心身ともに著しい成長を遂げる時期である。子どもたちは唐突な自我の目覚めに戸惑いつつも、自我を確立してくためにそれぞれ悪戦苦闘する。子どもから大人への過渡期でもある思春期は、それゆえの不安定さがまた特徴でもある。そのような不安定さを抱えつつも子どもたちは成長していくわけだが、思春期危機という言葉に表されるように、その時期は精神疾患の好発期であることも知られている。したがって、思春期の適応を考える上では、心理的社会的要因のみならず、心身の疾患の側面を含めて適応を捉える必要がある。

今日、子どものうつ病に関する注目が集まっている（Weering & Brent, 2006）。1980年以前、子どものうつ病はほとんど脚光を浴びることがなく、きわめて稀な疾患であると考えられてきた（e.g., 傳田・賀古・佐々木・伊藤・北川・小山、2004：Rie, 1966：田村、1995）。一般的にうつ病性障害(1)は内因性障害に分類されるが、心因性の軽度うつ状態にある子どもたちの増加（田村、1995）も見られるようになっている。子どもや思春期のうつ傾向は、将来の気分障害（Dunn & Goodyer,

*東北大学大学院教育学研究科博士後期課程
**東北大学大学院教育学研究科・助教授

2006）や教育課程における困難さなどを含めた様々な不都合（Weering & Brent, 2006）などを予測しうるとし､本邦においても近年子どもの抑うつ傾向に関する疫学的な調査が行われている。村田･清水・森・大島（1996）は、Birleson（1981）によるDSRS-C（Depression Self-Rating Scale for Children：子ども用うつ病スクリーニングテスト）の日本語版を作成し標準化した。そして、小学生395名を対象とした調査を行ったところ、9.6％（38名）がカットオフスコアを越えており、学年があがるにつれてカットオフスコア以上の抑うつ群の割合が高くなることを示している。また、傳田ら（2004）は小学生2175人､中学生1156人を対象とする調査を行い､小学生の7.8％､中学生の22.8％がカットオフポイントよりも高い抑うつ群であることを示した。さらに、佐藤･永作･上村･石川･本田・松田・石川・坂野・新井（2006）も小学生3324名を対象とした調査を行い、全体の11.6％がカットオフポイントを超える抑うつ群であることを示している。気分障害の臨床研究として､傳田･佐々木・朝倉・北川・小山（2001）によれば、大学病院の精神科を外来受診した発症年齢が９歳から17歳の児童・青年期症例のおよそ27.1％が気分障害であり、その時期のうつ病性障害の割合が少なくないこと述べている。

抑うつのリスク要因は個人的要因、認知的要因、社会的要因、家庭要因、外的な出来事の要因の５つに分類することができ（石川･戸ヶ崎･佐藤･佐藤、2006）、主に社会的要因や認知的要因に対する社会的スキルトレーニングやストレスマネジメントなどのプログラムの実施も行われている。しかし、全ての児童青年を対象とするユニバーサルタイプの予防プログラムに関しては、予防効果に関する結論は一致しておらず（石川ら、2006）、心理的要因の側面からも今後の更なる研究が求められている。また、国内外を問わず、成人を対象とした病因論研究は数多くあるが子どもに関する研究は非常に少ない（武田、2000）という指摘や、傳田ら（2001）による、上記のうつ病性障害の発症契機が認められたケースは全体のおよそ30％程度であり、発症契機にはいじめを含む学校場面に関連するものが最も多いという指摘から、学校場面における子どもの適応と抑うつ傾向との関連に関する実証研究の必要性もあげられる。佐藤・石川・新井・坂野（2005）によれば、抑うつ傾向の高い児童は授業に取り組む姿勢や態度といった学業達成に関連するスキルが欠如しており、また対人関係レベルでは引っ込み思案行動が多く見られると、教師から評価されていることが示されている。しかし、佐藤ら（2005）は上記に併せて、教師によって評価された学校場面における社会的スキルは、ほとんど児童の抑うつ傾向を予測できないことも指摘しており、教師評定による社会的スキルからうつ傾向を判断することの困難さを指摘している。

本研究においては、思春期の子どもの抑うつ傾向に関する実態調査を追試的に行うと共に、抑うつ傾向に関連する要因として、個人の過剰適応傾向と、学校適応に関する自己評定と保護者評定のズレという２つの観点を設定し、抑うつ傾向との関連性を検討することを目的とする。また、平均的な子どもより抑うつ傾向の高い子どもと、臨床的に抑うつと診断できる子どもでは特徴が異なる（小保方・無藤、2005）という指摘を踏まえ、本研究では抑うつ傾向を連続変量の観点から検討すると同時に、抑うつ群と非抑うつ群の比較といった、カテゴリカルな観点も取り入れることとする。

第一の観点として取り入れた過剰適応とは､「両親や友人､教師といった他者から期待されている

役割・行為に対し、自分の気持ちは後回しにしてでもそれらに応えようとする傾向」であり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うこと（石津、2006a）と定義される。ところで、山口・飯田・石隈（2005）は小学生の学校生活スキルと学校適応との関連を検討したところ、学校生活スキルと、学習面・進路面における適応との間に関連性があることを示している。一方、庄子・林田（2003）はソーシャル・スキルと「他者迎合」的なよい子傾向との間に関連性があることを示している。つまり、他者からの要求に敏感であり、周囲からの期待への感度も高くそれらを自分の課題として取り込む子どもは、ソーシャル・スキルが高く、客観的に適応しているように見える可能性がある。一方で、過剰適応傾向はうつ病や転換性障害をはじめとした精神疾患との関連性も同時に指摘されており、客観的な適応を高めうる過剰適応は同時に抑うつ傾向とも関連性を持つことが想定される。本邦における実証的な過剰適応研究は非常に数が少ないが、過剰適応は社会的適応を促す一方で、自らの「生の感情」を抑圧する（桑山、2003）ことが示されており、過剰適応と抑うつ傾向との関連性の検討には意義があると考えられる。なお、うつ病と過剰適応に関して峰松（1999）は、円満な対人関係を維持せんがために「ノー」とは言えず自分のほうが折れてばかりで、思い切って断ったとしても、それを後悔することしきりであれば、それは度が過ぎた適応であると述べている。さらに相馬（2005）も、保護者や教師から「がんばれ」と言われ、がんばりすぎた子どもたちの過剰適応が、抑うつ傾向の一因となる可能性を示している。しかしながら、上述の武田（2000）の指摘のように子どものうつ傾向に対する実証的な病因論研究の少なさという問題をはじめ、精神疾患や不適応と過剰適応との関連性は実証的にはほとんど示されておらず、あくまで過剰適応の非適応性に関する指摘は臨床場面における主観的記述がなされるにとどまっている（桑山、2003）。そこで本研究の第一の目的として、過剰適応と抑うつ傾向の関連性を検討することとし、また、過剰適応における「過剰」という概念に対する新たな提言を行うことも目的とする。

一方、適応は個人的適応（内的適応）と社会的適応（外的適応）の２つに分類される（北村、1965）。前者は幸福感や満足感を経験し心的状態が安定していることを意味し、後者は個人が所属する文化や社会的環境に対する適応を意味するとしている。つまり、外的適応とは外部から主に行動レベルで判断ができるような客観的適応であり、内的適応とは自分自身の心理について主に感覚レベルで判断される主観的適応、と言い換えても差し支えないだろう。しかし、“個人の主観的世界、現象的内的枠組みにおける適応、自己受容、自尊感情、幸福感”と定義される内的適応には独自の価値観が含まれ、包括的に測定することは困難ゆえ、内的適応と外的適応を直接的に比較検討することは困難と思われる（石津、2005）。内的適応と外的適応を直接比較したものではないが、学校生活における満足度を自己評定と担任教師評定の二つの側面から測定し、そのズレに焦点をあてた研究には藤村・河村（2001）がある。藤村・河村（2001）によれば、担任教師は子どもの満足度を低く見積もることや、ズレの小さい教師の学級は学級に満足している子どもが多いことが示されており、教師の児童理解と児童の学級適応には密接な関係にあることが示されている。そこで本研究においては、子どもの学校適応に関する自己評評定と保護者による評定のズレの観点から、子どもの

抑うつ傾向との関連性を検討する。教師は普段から学校場面において子どもと接する機会があり、子どもの適応状態を実際に観察することができるが、保護者は子ども自身や教師などが発信する情報から間接的に子どもの適応状態を推測する機会も多く、また親子のコミュニケーションの親密性がズレに強く影響すると考えられる。また、先行研究ではズレの大きさを扱っていたが、ズレの種類（ズレがあった場合どちらが高く（低く）評定していたか）の視点は含まれていなかった。そこで、本研究の第二の目的として、親と子どもの適応に関する評定のズレの種類の視点を取り入れ、抑うつ傾向との関連性を検討することをあげる。

研究 1

目的

研究 1 においては、中学生の抑うつ傾向に関する実態の追試的調査を行うことと、抑うつ傾向と過剰適応との関連性を検討することを目的とする。

方法

本研究の目的および方法、質問項目のサンプル、プライバシーの保護に関する文書と共に調査への協力のお願いを仙台市内の複数の中学校に送付したところ、 4 校の中学校から調査に関する同意が得られた。調査は生徒および保護者に対して行われたが、回答は強制ではなく任意であること、成績には一切関係がないこと、回答内容を先生や友人等にみられることはなくプライバシーが保障されることを明記した上で匿名にて回答をお願いした。また、アンケート用紙と同時に生徒用、保護者用にそれぞれに封筒を渡し、それぞれ密封した上で回収を行った。

調査協力者

回答に著しい不備のあるものを除き、中学生1456名を研究 1 における分析対象とした。回答者の内訳は中学 1 年501名、中学 2 年生452名、中学 3 年生503名であり、男子752名、女子694名、性別不明が10名であった。平均年齢は13.57歳であり標準偏差は.95であった。

質問紙の構成

1）子ども用抑うつ自己評価尺度

子どもの抑うつ傾向の測定にはBirleson（1981）による尺度（DSRS-C）の日本語版（村田ら、1996）を使用した。DSRS-Cは18項目から構成される質問紙であり、最近 1 週間の状態を尋ね、 3 件法で回答してもらう尺度である。各項目において抑うつ傾向が高くなると考えられるほうから順に 2 点、 1 点、 0 点と採点される。なお、本研究においては、いじめに関する質問項目と、自殺念慮を予想させると考えられる質問項目の 2 つを倫理的な基準を配慮したうえで尺度項目から除外し、合計16項目を用いた。なお16項目版を用いたものには佐藤ら（2006）があり、16項目版であっても信頼性と妥当性は保たれることが確認されている。

2）過剰適応尺度

石津（2006a）が作成した青年期前期用過剰適応尺度の33項目を用いた。石津（2006a）によれば過剰適応尺度は「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」の 5 因子から構成され、信頼性および妥当性が確認されている。回答は「とても当てはまる＝ 5 」から「まったくあてはまらない＝ 1 」の 5 件法で求められた。

なお、回答に著しく欠損値が見られたケースは分析対象から除外したが、欠損値が少ないケースに関しては、欠損値に系列平均値を代入したうえで分析を行った。

結果

1―1．因子分析結果

抑うつ傾向は単因子構造であることが仮定されており、回答結果をもとに主成分分析を行ったところ、全ての項目が第 1 主成分に.41以上の負荷量をしていたため、全ての項目の合計得点を個人の抑うつ傾向得点として今後の分析を行うこととした。また、抑うつ群とそうでない群を識別するためのカットオフスコア（村田ら、1996）は、先行研究ではBirleson（1981）が17点、村田ら（1996）は16点を基準としている。ただしこれらの先行研究は18項目版であり、本研究では 2 項目を除し16項目を用いていること、また、本研究の抑うつ傾向得点（16項目）の平均値が8.70であること、 1 つの質問項目の平均得点が.50付近であることから、本研究では15点をカットオフスコアとした。

一方、過剰適応尺度33項目を最尤法・プロマックス回転によって因子分析したところ、先行研究どおりの 5 因子が抽出された。そこで先行研究どおり「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」の 5 因子を、それぞれの因子の得点として算出し、以下の分析に用いた。

1―2．中学生の抑うつ傾向の追試的調査

DSRS-Cの平均得点は8.70であり標準偏差は6.76であった。また、調査者全体でカットオフスコア（15点）を上回る生徒の割合を算出したところ、全体の20.1％がカットオフスコアを上回る得点であった。男女別にも検討を行ったところ、男子の15.8％、女子の24.9％がカットオフスコアを上回る得点を示した。学年別にも検討を行ったところ、 1 年生の15.0％、 2 年生の20.8％、 3 年生の24.7％がカットオフスコアを上回る得点であった。傳田ら（2004）によれば、中学生の22.8％がDSRS-Cのカットオフスコアを超えることが確認されており、本研究でもほぼ同様の結果が見られた。一方で、菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）を参考に、うつ病がほとんど疑われないDSRS-Cの合計得点が 3 点以下である非抑うつ群の割合を算出したところ、全体の27.3％が非抑うつ群と考えられた。男女別では、男子32.8％、女子21.3％が、学年別では、 1 年生が28.9％、 2 年生が30.8％、 3 年生の22.5％が非抑うつ群と考えることができた。また、結果一覧をTable 1 に表示した。

Table 1．学年別および男女別の抑うつ傾向の実態

DSRS-C得点＼学年	1 年生	2 年生	3 年生	全学年
抑うつ群 （15点以上）	男子　10.6% 女子　20.0% 全体　15.0%	男子　16.4% 女子　25.9% 全体　20.8%	男子　21.1% 女子　28.5% 全体　24.7%	男子　15.8% 女子　24.9% 全体　20.1%
非抑うつ群 （3 点以下）	男子　30.8% 女子　26.7% 全体　28.9%	男子　38.8% 女子　22.7% 全体　30.8%	男子　29.6% 女子　15.4% 全体　22.5%	男子　32.8% 女子　21.3% 全体　27.3%

1―3．性差と学年差

抑うつ症状の性差と学年差を検討するために、DSRS-C得点について性別と学年を要因とする 2 × 3 の分散分析を行ったところ、性別および学年の主効果が見られた（性差：$F(1,1440)=27.76$、$p<.01$；学年差：$F(2,1440)=10.72$、$p<.01$）。性差では女子が男子よりも有意にDSRS-C得点が高いことが示された。学年差に関してはTukey法による多重比較を行ったところ、3 年生が 2 年生と 1 年生よりも、2 年生が 1 年生よりも有意にDSRS-C得点が高いことが示された。

1―4．過剰適応傾向と抑うつ傾向との関連性

過剰適応尺度の下位尺度である「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」と抑うつ傾向との相関係数を算出したところ、$r=.14$～$.60$（$p<.01$）の相関が見られ、過剰適応傾向と抑うつ傾向との関連性が示された（Table 2 ）。

Table 2．過剰適応傾向と抑うつ傾向との相関係数

	M	SD	抑うつ傾向との相関係数
Ⅰ自己抑制	21.30	5.83	.32**
Ⅱ自己不全感	19.16	4.93	.60**
Ⅲ他者配慮	27.17	5.32	.26**
Ⅳ期待に沿う努力	21.66	5.22	.18**
Ⅴ人からよく思われたい欲求	17.72	3.72	.14**
Ⅵ抑うつ傾向得点	8.70	6.76	1.00

**$p<.01$

また、DSRS-C得点がカットオフスコア以上の抑うつ群と、同得点が 3 点以下の非抑うつ群それぞれの過剰適応傾向の下位尺度得点を比較したところ（Table 3 ）、全ての下位尺度得点において、

Table 3．抑うつ群と非抑うつ群における過剰適応得点

	抑うつ群 （293名）	非抑うつ群 （397名）	t値
Ⅰ自己抑制	24.25（6.45）	18.94（5.44）	11.70**
Ⅱ自己不全感	23.82（4.29）	15.75（3.87）	25.97**
Ⅲ他者配慮	29.14（5.98）	25.26（4.88）	8.88**
Ⅳ期待に沿う努力	22.91（5.84）	20.26（5.07）	6.37**
Ⅴ人からよく思われたい欲求	18.26（3.97）	16.83（3.56）	4.96**

**$p<.01$

抑うつ群が非抑うつ群よりも有意に得点が高くなることが示された（「自己抑制」：$t(688)=11.70$、$p<.01$;「自己不全感」$t(688)=25.97$、$p<.01$;「他者配慮」$t(688)=8.88$、$p<.01$;「期待に沿う努力」$t(688)=6.37$、$p<.01$;「人からよく思われたい欲求」$t(688)=4.96$、$p<.01$）。

一方、過剰適応尺度の下位尺度の組み合わせパターンからより個人的な特徴を特定するため、5つの下位尺度得点についてK-means法によるクラスタ分析を行った。その結果、各クラスタに含まれる人数およびクラスタの解釈の可能性から 5 クラスタによる分類を採用した。各クラスタの特徴を以下に記す（Figure 1 ）。

第 1 クラスタ：全ての下位尺度得点が高い群（N＝303）

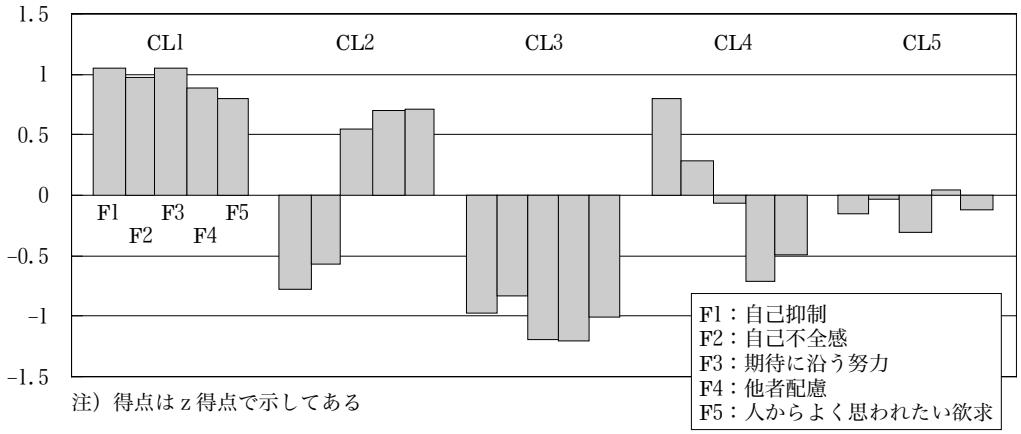
第 2 クラスタ：「自己抑制」「自己不全感」得点のみが低い群（N＝240）

第 3 クラスタ：全ての下位尺度得点が低い群（N＝246）

第 4 クラスタ：「自己抑制」「自己不全感」得点のみが高い群（N＝222）

第 5 クラスタ：全ての下位尺度得点が平均的な平均群（N＝445）

各クラスタパターンと抑うつ傾向との関連を検討するため、5 つのクラスタパターンを独立変数、DSRS-C得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところ、クラスタ群の主効果が有意であった（$F(4,1451)=81.63$、$p<.01$）。そこでTukey法による多重比較を行ったところ、クラスタ 1 が最も抑うつ得点が高く、クラスタ 2 およびクラスタ 3 が最も抑うつ得点が低くなることが示された（Table 4 ）。



注）得点はｚ得点で示してある

Figure 1．過剰適応傾向の各クラスタの特徴

Table 4．各クラスタの抑うつ傾向得点と分散分析結果

	CL1（N＝303）	CL2（N＝240）	CL3（N＝246）	CL4（N＝222）	CL5（N＝445）	*F*値	多重比較（Tukey）
抑うつ傾向	13.61	6.30	5.38	10.13	7.78	81.63**	CL1＞4＞5＞2、3
（SD）	（7.16）	（4.97）	（5.75）	（6.53）	（5.89）		

**$p<.01$

考察

本研究の結果からは、中学生全体のおよそ20.1％がカットオフスコアを超える抑うつ群であることが示された。さらに男子よりも女子の方に抑うつ群が多く存在し、また学年があがるにつれて抑うつ群の割合が増えることが示された。この結果は先行研究の結果と同様のものであった。また、うつ病は13歳以降に増加していく（Hankin & Abramson, 2001）ことやさらに、小児人口のおよそ５％が抑うつの影響を受けている（Brock, Nguyen, Liu, Watkins, & Reutzel, 2006）という報告からも、子どもの抑うつに関する状況は楽観のできる状態ではないことを改めて示す形となった。

抑うつの性差に関しては小学校を対象とした研究では女子の方が男子よりも高いという結果（佐藤ら、2006）や小学校低学年では性差がないとする結果（傳田ら、2004）があるが、思春期を対象とした本研究の結果では、女子が男子よりも有意に高い得点を示し、思春期までには成人同様に女性が男性よりも高くなるという指摘（Harrington, 1994）を支持するものであった。また、学年差であるが、小学校４～６年生を対象とした場合、学年差はみられないとする結果（佐藤ら、2006）や、小学校２～６年生を対象とした場合、５年生以降で得点が変化する可能性を示唆した結果（村田ら、1996）もあるが、本研究では１年生から３年生までの全ての段階において平均得点は有意に上昇することが示され、思春期という時期においては抑うつ傾向も１学年単位で大きく変化する可能性が示唆された。

一方、過剰適応傾向と抑うつ傾向との関連であるが、相関係数による検討を行ったところ、過剰適応の下位尺度と抑うつ傾向との間には弱～中程度の関連性が見られた。さらに､抑うつ群（DSRS-C15点以上）と非抑うつ群（同３点以下）の過剰適応傾向得点を比較したところ、全ての下位尺度得点において抑うつ群のほうが非抑うつ群よりも得点が高かった。また、クラスタ分析の結果、最も抑うつと関連したクラスタは全ての得点が高い群であることが示された。この結果から、過剰適応における「過剰」の概念について提言することができると思われる。そもそも過剰適応においては、どこからが「過剰」であるかは現在のところ特定されておらず、過剰適応はあくまで個人の「傾向」を指し示す概念である。本研究においては、抑うつ傾向と「過剰適応」との関連性を検討したが、その結果から全ての下位尺度得点と抑うつ傾向は相関関係にあり、また全ての得点が高いクラスタ群は最も抑うつ傾向と関連した。そこで、抑うつ傾向の観点から過剰適応の「過剰」の指し示すところを以下の定義によって示したい。すなわち、過剰適応における「過剰」をDSRS-Cが15点以上である抑うつ群の観点から検討し、抑うつ群における過剰適応尺度の５つの下位尺度得点を全て超える者を過剰適応者と操作的に定義することとする（Table３参照）。したがって、「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」それぞれの得点が、24点、24点、29点、23点、18点を超える者を過剰適応者と定義する（小数点以下は四捨五入）。

この定義による過剰適応者は研究１における調査協力者1456名のうち63名であり、全体の4.6％であった。また、過剰適応者のDSRS-C平均得点は17.61（SD5.54）であった。しかし、ここでの過剰適応者とは、あくまで抑うつ傾向との関連性のみから操作的に定義したものであるため、ここでの定義は当座の定義である。今後は過剰適応を定義するための要因を増やし、その定義を別の側面か

らも精緻化していく必要があるだろう。過剰適応研究の今後の課題として記したい。

研究 2

目的

研究 2 においては子どもの学校適応に関する自己評定と保護者評定のズレの観点から、子どもの抑うつ傾向との関連を検討することを目的とする。

方法

調査協力者

生徒に関しては、研究 1 における協力者と同様であったが、保護者との対応が取れない者に関しては研究 2 においては分析の対象から除した。その結果、研究 1 と同様の中学生1134名とその保護者を分析の対象とした。

回答者の内訳は中学 1 年422名、中学 2 年生365名、中学 3 年生348名であり、男子587名、女子556名であった。保護者は母親が1092名、父親が51名であった。

質問紙の構成

1）子ども用抑うつ自己評価尺度

研究 1 で用いたDSRS-Cを研究 2 においてもそのまま使用した。

2）学校適応に関する尺度

内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1986）によって作成された、高校生用学校環境適応感尺度における項目のうち、「勉強」「友人関係」の 2 領域について尋ねた。また質問項目をできるだけ少なくするために、それぞれの領域での質問項目は、同様の質問項目を用いた石津（2005）で示された因子分析結果における因子負荷量の高かった上位 5 項目用いた。まず、生徒用質問紙では、自分が質問項目にどの程度当てはまるか「とても当てはまる＝ 5 」～「まったくあてはまらない＝ 1 」までの 5 件法で回答してもらった。一方、保護者に関しては、現在のお子さんにどの程度質問項目が当てはまると思うかについて、生徒と同様に「とても当てはまる＝ 5 」～「まったくあてはまらない＝ 1 」までの 5 件法で回答してもらった。

結果

2―1．因子分析結果

学校適応に関する10項目を生徒および保護者別に、主因子法・バリマックス回転によって因子分析を行ったところ、どちらも「友人関係」と「勉強」の 2 因子が抽出された（Table 5 ）。生徒用における各因子の寄与率は、第一因子33.91％、第二因子21.38％であり、累積寄与率は55.29％であった。保護者における各因子の寄与率は、第一因子44.79％、第二因子25.84％であり、累積寄与率は70.62％であった。そこで、「友人関係」および「勉強」のそれぞれの因子における合計得点から「友

人適応得点」と「勉強適応得点」を生徒と保護者それぞれに算出した。

Table 5．学校適応尺度の因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）

	自己評定		保護者評定	
	F1	F2	F1	F2
ある程度勉強ができるほうだ。	.83	.07	.90	.11
いつも満足できる成績をとっている。	.75	-.01	.90	.06
授業を理解していると思う。	.75	.10	.90	.12
部活動や行事と、勉強が両立していると思う。	.70	.11	.81	.14
勉強にすすんで取り組んでいると思う。	.65	.15	.81	.13
たくさんの友達がいる。	.06	.77	.08	.83
人あたりがよく､人とうまくつきあえるほうだ。	.15	.76	.12	.87
性格が明るい方である。	.01	.73	.03	.76
楽しい友達関係を持っている。	.09	.71	.14	.79
学校の誰とでも気軽に話せる。	.13	.70	.15	.75
固有値	3.31	2.14	3.80	3.26
寄与率	33.91	21.38	37.99	32.63
累積寄与率		55.29		70.62

2―2．友人適応得点と勉強適応得点における自己評定と保護者評定のズレの実態

友人と勉強のそれぞれの領域における保護者評定を「外的友人適応得点」「外的勉強適応得点」と操作的に記述し、同様に生徒自身による評定を「友人適応得点」「勉強適応得点」とした上で、それぞれの得点と標準偏差をTable 6 に示した。また、それぞれの領域別に対応のあるt検定を行ったところ、「外的友人適応得点」は「友人適応得点」よりも有意に高く（$t(1142)=11.60$、$p<.01$）、また「外的勉強適応得点」も「勉強適応得点」よりも有意に高い（$t(1142)=14.75$、$p<.01$）ことが示された。すなわち、保護者は、子どもの学校適応に関する適応を子ども自身より高めに見積もることが示された。

Table 6．学校適応の保護者評定と自己評定のズレ

	外的友人適応	友人適応	t値
平均値	19.90	18.43	11.60**
（SD）	（3.93）	（4.23）	
	外的勉強適応	勉強適応	
平均値	15.99	14.06	14.75**
SD	（5.01）	（4.60）	

**$p<.01$

2―3．適応に関する保護者評定と自己評定と抑うつ傾向との関連

「外的友人適応得点」と「外的勉強適応得点」、「友人適応得点」と「勉強適応得点」と抑うつ傾向との相関係数を算出した（Table 7）。その結果、「外的友人適応得点」と「外的勉強適応得点」と抑うつ傾向との相関係数はそれぞれ、$r=-.18$（$p<.01$）、$r=-.13$（$p<.01$）であるのに対し、「友人適応得点」と「勉強適応得点」と抑うつ傾向との相関係数はそれぞれ、$r=-.44$（$p<.01$）、$r=-.26$（$p<.01$）であり、自己評定と比較して保護者評定は相対的に抑うつ傾向との関連が弱いことが示された。

Table 7．適応に関する保護者評定と自己評定と抑うつ傾向との関連

	保護者評定		自己評定	
	外的友人適応	外的勉強適応	友人適応	勉強適応
抑うつ傾向	-.18**	-.13**	-.44**	-.26**

**p<.01

2―4．保護者評定と自己評定のズレのタイプと抑うつ傾向との関連

1）友人適応におけるズレの観点から

「外的友人適応得点」および「友人適応得点」の組み合わせパターンを検討するために、K-mean 法によるクラスタ分析を行ったところ、各クラスタに含まれる人数およびクラスタの解釈の可能性から 4 つのクラスタを採用した。各クラスタの特徴を以下に記す（Figure 2 ）。

第 1 クラスタ：「外的友人適応」と「友人適応」の両得点が高い群（N＝378）

第 2 クラスタ：「外的友人適応」が低く「友人適応」が高い群（N＝252）

第 3 クラスタ：「外的友人適応」が高く「友人適応」が低い群（N＝290）

第 4 クラスタ：「外的友人適応」と「友人適応」の両得点が低い群（N＝223）

各クラスタパターンと抑うつ傾向との関連を検討するため、4 つのクラスタパターンを独立変数、DSRS-C得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところクラスタパターンの主効果が有意であった（F(3,1139)＝54.48、p<.01）。そこでTukey法による多重比較を行ったところ、両得点共に低いクラスタ 4 が最も抑うつ得点が高く、続いて外的適応は高いが自己評価の低いクラスタ 3 が、抑うつ得点が高くなることが示された。また、クラスタ 1 とクラスタ 2 の抑うつ傾向得点には有意差は見られなかった（Table 8 ）。

2）勉強適応におけるズレの観点から

「外的勉強適応得点」および「勉強適応得点」の組み合わせパターンを検討するために、K-mean 法によるクラスタ分析を行ったところ、各クラスタに含まれる人数およびクラスタの解釈の可能性から上記と同様の 4 つのクラスタを採用した。各クラスタの特徴を以下に記す（Figure 3 ）。

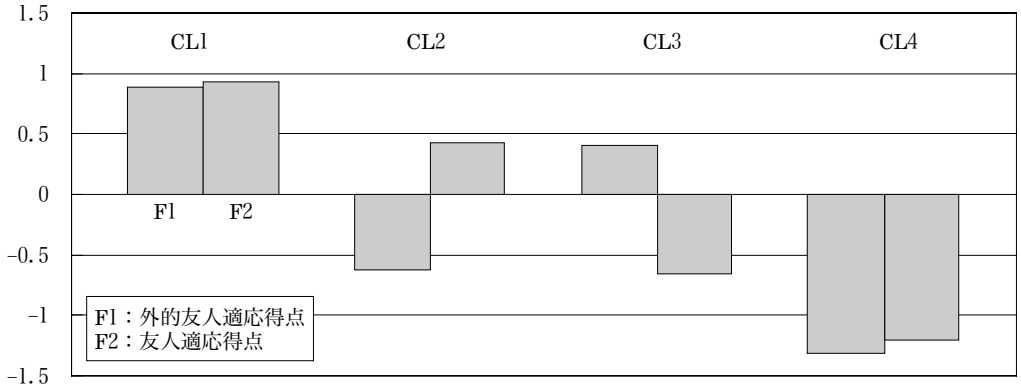
第 1 クラスタ：「外的勉強適応」と「勉強適応」の両得点が高い群（N＝308）

第 2 クラスタ：「外的勉強適応」が高く「勉強適応」が低い群（N＝356）

第 3 クラスタ：「外的勉強適応」が低く「勉強適応」が高い群（N＝233）

第 4 クラスタ：「外的勉強適応」と「勉強適応」の両得点が低い群（N＝246）

各クラスタパターンと抑うつ傾向との関連を検討するため、4 つのクラスタパターンを独立変数、DSRS-C得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところクラスタパターンの主効果が有意であった（F(3,1139)＝20.70、p<.01）。そこでTukey法による多重比較を行ったところ、両得点共に低いクラスタ 4 が最も抑うつ得点が高く、両得点共に高いクラスタ 1 は最も抑うつ傾向が低くなった。また、クラスタ 2 とクラスタ 3 の抑うつ傾向得点には有意差は見られなかった（Table 9 ）。



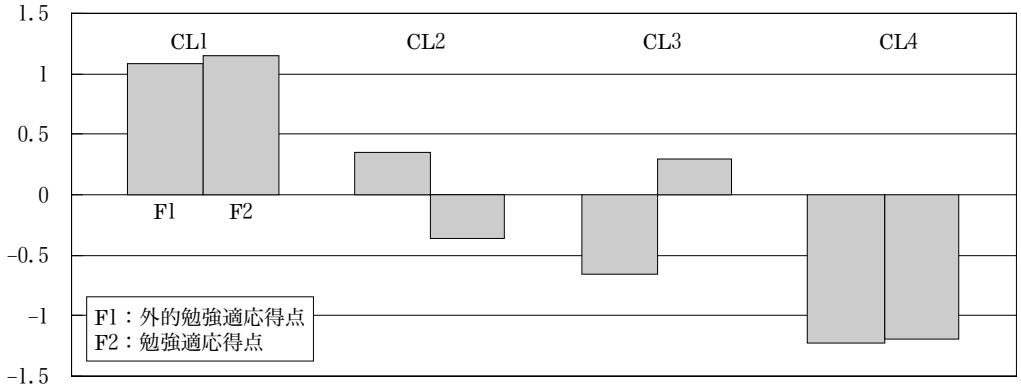
注）得点はｚ得点で示してある

Figure 2． 外的友人適応と友人適応の各クラスタの特徴

Table 8． 友人領域における各クラスタと抑うつ傾向得点と分散分析結果

	CL1 (N＝378)	CL2 (N＝252)	CL3 (N＝290)	CL4 (N＝223)	*F*値	多重比較 (Tukey)
抑うつ傾向 (SD)	6.21 (5.71)	6.82 (5.74)	10.15 (6.65)	12.12 (7.13)	54.48**	CL4＞3＞1、2

**p＜.01



注）得点はｚ得点で示してある

Figure 3． 外的勉強適応と勉強適応の各クラスタの特徴

Table 9． 勉強領域における各クラスタと抑うつ傾向得点と分散分析結果

	CL1 (N＝308)	CL2 (N＝356)	CL3 (N＝233)	CL4 (N＝246)	*F*値	多重比較 (Tukey)
抑うつ傾向 (SD)	6.71 (5.60)	8.98 (6.42)	7.62 (6.70)	10.88 (7.49)	20.71**	CL4＞2、3＞1

**p＜.01

2―5．抑うつ群、非抑うつ群と各クラスタの人数の偏り

上記までの分析に加え、抑うつ傾向のカットオフスコアを超える抑うつ群と、うつ病の可能性が低いと考えられるDSRS-C得点が 3 点以下の非抑うつ群に対する、友人と勉強それぞれの領域のク

ラスタの人数に偏りがあるかを検討した。

１）友人適応領域

４つのクラスタ群（クラスタ１～クラスタ４）×２つのうつ傾向得点（抑うつ群・非抑うつ群）に対し、χ^2検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった（$\chi^2(3)=133.98$、$p<.01$）。残差分析を行った結果、Table10に見られるように、自己評定と外的評定の両得点が高い場合、抑うつ群が少なくなり、両得点が低い場合抑うつ群が多くなることが示された。また、両得点にズレが見られる場合、外的評価が低くても自己評定が高い場合抑うつ群は少ないが、外的評定が高くても自己評定が低い場合は抑うつ群が増えることが示された。

２）勉強適応領域

上記同様にχ^2検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった（$\chi^2(3)=43.99$、$p<.01$）。残差分析の結果、上記の友人領域と同様に自己評定と外的評定の両得点が高い場合、抑うつ群が少なくなり、両得点が低い場合抑うつ群が多くなることが示されたが、自己評定と保護者評定にズレが見られるクラスタどうしには抑うつ群と非抑うつ群の人数の偏りは示されなかった（Table11）。

Table10.　友人領域における各クラスタ群×抑うつ群・非抑うつ群のχ^2検定結果

	CL1	CL2	CL3	CL4
抑うつ群（人数）	34	26	75	86
調整済み残差	-7.9	-4.3	4.3	9.0
非抑うつ群（人数）	154	86	57	23
調整済み残差	7.9	4.3	-4.3	-9.0

Table11.　勉強領域における各クラスタ群×抑うつ群・非抑うつ群のχ^2検定結果

	CL1	CL2	CL3	CL4
抑うつ群（人数）	36	73	39	73
調整済み残差	-4.9	1.8	-1.9	5.3
非抑うつ群（人数）	113	83	79	45
調整済み残差	4.9	-1.8	1.9	-5.3

考察

藤村・河村（2001）は、教師は子どもの学校への満足度を低く見積もることを明らかにしているが、本研究の結果からは親は子どもの適応を高く見積もることが示され、教師と保護者は子どもの適応を対極的に評定する可能性が示された。また、保護者評定と自己評定と抑うつ傾向との関連を検討したところ、保護者評定と抑うつ傾向との関連性は自己評定と比較すると相対的に低く、親が子どもの学校適応の観点から抑うつ傾向を予測することは困難である可能性が示唆された。すなわち中学生における学校適応に関する外的適応はそれほど抑うつ傾向を説明しないことが示された。また、保護者評定においても自己評定においても勉強領域は友人領域よりも抑うつとの関連性が相対的に弱いことも示された。

一方、学校適応における評定のズレが生じた場合、勉強領域ではズレの種類と抑うつ傾向の得点

差は見られなかったが友人領域に関しては、自己評定が高く保護者評定が低い場合、抑うつ傾向得点が低くなるのに対し、保護者評定が高く自己評定が低い場合に抑うつ傾向が高まることが示された。このことから、一つの懸念が生じるだろう。すなわち、抑うつ傾向を持つ子どもの一部の親は、子ども自身はそう思えていないにもかかわらず、子どもが学校に適応していると認識している可能性があるということが実証的に示されたということである。そしてこのことは、文化的基準や社会からの要求には適応していると見なすことができるが内的には苦悩している可能性（北村、1965）を具体的に示しており、客観的な適応と個人の苦悩とが乖離している現象と見なすことができるだろう。この点に関しては過剰適応の側面も含めて、以下に詳しく考察したい。

全体的考察

本研究の第一の目的は、中学生の抑うつ傾向に関する実態調査を追試的に検討することであり、また過剰適応と抑うつ傾向との関連を検討することであった。

本研究で第一に検討した抑うつ傾向との関連要因は個人の過剰適応傾向であった。その結果、過剰適応傾向と抑うつ傾向との関連性が認められ、個人が環境に過剰に適応することで個人の抑うつ傾向が高まることも示された。過剰適応の一形態しては「よい子」が考えられるが、年齢不相応な「よい子」が予測不可能かつ唐突に重大事件を起こすリスクや、自傷行為や自殺のリスク（大河原、1998）も指摘されており、一見適応しているように見られる子どもの衝動的な行為に注目が集まっている。自傷行為や自殺と、抑うつとの関連はすでに多く指摘されているとおりだが、実際にそのような衝動的な行為が為される前に周囲の大人は子どもの抑うつ傾向や心身の不調を感じ取ることは可能なのだろうか。この点について、以下に試論を行う。

石津（2006b）によれば、過剰適応の因子のうち 5 つの全ての因子がストレス反応と正の相関を持ち、同時に「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」の 3 因子は学校適応感とも正の相関があることが示されている。すなわち、個人が過剰適応的に振舞うことによって学校での適応感を高めること示唆されており、過剰適応が必ず非適応的とは限らない可能性を指摘している。一方で、本研究においては、過剰適応は抑うつ傾向と関連することも示され、過剰適応は互いに相反する「適応」と「不適応」のそれぞれと正の関連を持つ概念なのかもしれない。つまり、過剰適応することによって個人の学校適応を支えると同時に、一方では苦悩している可能性が示されたといえよう。また、クラスタ分析の結果、最も抑うつと関連したクラスタは全ての得点が高い群であることが示された。過剰適応は「自己抑制」「自己不全感」「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」の 5 因子から構成されるが、このうち「自己抑制」や「自己不全感」は個人の特性的な内面を反映するものと捉えることができ、桑山（2003）の示すところの「対自因子」に近い概念と考えられる。一方、「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」は、他者志向的で主に行動レベルから捉えられる「対他因子（桑山、2003）」に近い概念であろう。教師や養育者は子どもの対他的側面、すなわち子どもが見せる行動レベルの情報から生徒の状態や適応を予測すると考えられる。その場合、本研究における「他者配慮」「期待に沿う努力」「人から

よく思われたい欲求」が高い者を適応していると捉える可能性がある。そして、このような対他因子得点が高いクラスタを本研究では2つ示していた。一つは、「対自因子」も「対他因子」も高いクラスタ1であり、もう一つは「対自因子」が低く「対他因子」が高いクラスタ2であった。対他的側面から個人の状態や適応を判断する場合、これらのクラスタに所属するもの同士の客観的区別は困難であろう。しかし、クラスタ1が最も高い抑うつ傾向を示したのに対して、クラスタ2に関しては、抑うつ傾向が最も低いことが示されている。他者志向的で主に行動レベルから捉えられる対他因子から個人の適応を捉えた場合、クラスタ1とクラスタ2の区別はできないことになるが、クラスタ1とクラスタ2の抑うつ得点には大きく違いがあった。以上から、個人の適応の観点から抑うつ傾向を捉えようとする場合、「自己不全感」や「自己抑制」の観点を踏まえる必要があることが理解できるが、過剰適応者はネガティブだが人間的な感情を悪いものとして抑圧する（桑山、2003）可能性を踏まえると、「自己不全感」や「自己抑制」する部分を他者には見せにくいことも十分に予想され、過剰適応者の苦悩は一層周囲に伝わりにくいとも考えられる。

上記から、過剰適応的で外部からは適応しているように見える子どもに関しても、抑うつ傾向のリスクを持っていることが考えられることが実証的に示されたといえよう。さらに、この指摘は研究2の結果からも補強される。すなわち、抑うつ傾向の高い子どもであっても保護者からは適応していると見なされているケースが多く存在していることが示された。この場合、保護者が子どものよい面を見ようとしない可能性や、子どもが保護者に自らのよい部分しか見せられない可能性を考えることができる。親が、我が子を「よい子」だと（他者に）見られることを願う場合や、自分の前で「よい子」であることを願う場合、子どもは早熟に完璧な完成された子ども像を求められ、それが子どもの感情の社会化を困難にさせる（大河原、2004）。また、ネガティブな感情が社会化されない場合、大人は「にこにこ、元気、まじめ」といった理想的な子ども像の見ることができるが、その一方で「不安、怒り、憎しみ」といったネガティブな情動は子どもの中に身体レベルで蓄積されていく（大河原、2004）。ネガティブな感情を意識から締め出すことは「抑圧型（佐藤・安田、1999）」と呼ばれるが、抑圧型では陰性情動の認知が損なわれており、身体疾患で様々な問題が生じうる（佐藤・安田、1999）という指摘もある。抑うつ傾向の持つ子どものリスクが見逃される可能性は非常に大きいと言わざるを得ないだろう。このことから、突然の自殺や（自他への）攻撃的行為、抑うつ状態といった様々な反応が起きた場合、多くのケースで、環境側から見た普段の様子とそれらの反応との間に乖離があるとされる現象の一部が実証されるだろう。

子どもの抑うつ症状のアセスメントは自己評定、保護者評定、臨床家評定などを総合的に実施する必要があるとされている（Stark, 1990）が、学校現場ではこうした実践を行うことは困難といえるだろう。子どもの抑うつに影響を与える要因についての研究と共に、潜在的に抑うつ傾向を抱える子どもたちをいかに効率的に発見していくか、一見適応しているように見える子どもたちに対する援助の可能性をいかに増やしていくか、という視点を取り入れていくことも、今後の子どもの抑うつ研究の課題としてあげられるだろう。

【註】

⑴　うつ病性障害は、大うつ病性障害、気分変調性障害、特定不能のうつ病性障害から構成される。

【引用文献】

Birleson, P. 1981 The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self-rating scale: A research report. Journal of Child psychology and Psychiatry, 28, 73-88.

Brock, K., Nquyen, B., Liu, N., Watkins, M., & Reutzel, T. 2005 The Use of antidepressants in school-age children. Journal of school nursing, 21, 318-322.

傳田健三・加古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司　2004　小・中学生の抑うつ状態に関する調査――Birleson自己記入式抑うつ評価尺度（DSRS-C）を用いて――　児童青年精神医学とその近接領域、45、424-436.

傳田健三・佐々木幸哉・朝倉聡・北川信樹・小山司　2001　児童・青年期の気分障害に関する臨床的研究　児童青年精神医学とその近接領域、42、277-302.

Dunn, V., & Goodyer, I. M. 2006 Longitudinal investigation into childhood and adolescence-onset depression: Psychiatric outcome in early adulthood. British Journal of Psychiatry, 188, 216-222.

Hankin, B.J., & Abramson, L.Y. 2001 Development of gender differences in depression: An elaborated cognitive vulnerability-transactional stress theory. Psychological Bulletin, 127, 773-796.

藤村一夫・河村茂雄　2001　学究生活に対する児童認知とそれを推測する担任教師の認知とのずれについての調査研究　カウンセリング研究、34、284-290.

石津憲一郎　2005　中学生の学校環境に対する価値的重みづけと学校適応　日本教育心理学会第47回大会発表論文集、615.

石津憲一郎　2006a　過剰適応尺度作成の試み　日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集、137.

石津憲一郎　2006b　中学生の過剰適応傾向と学校適応感、ストレス反応との関連について　日本教育心理学会第48回大会発表論文集、362.

北村晴朗　1965　適応の心理　誠信書房

桑山久仁子　2003　外界への過剰適応に関する一考察　――欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして――　京都大学大学院教育学研究科紀要、49、491-493.

峰松則夫　1999　過剰適応してませんか?!……現代社会のうつ病チェック　刑法、110、28-35.

村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子　1996　学校における子どものうつ病　――Birlesonの小児期うつ病スケールからの検討――　最新精神医学、1、131-138.

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三　1986　高校生用学校環境適応感尺度の試み　兵庫教育大学研究紀要、7、135-146.

小保方晶子・無藤隆　2005　中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向の関連　心理臨床学研究、23、533-545.

大河原美以　1998　そぶりを見せずに自殺企図をくりかえす中学生事例への危機介入　カウンセリング研究、31、142-152.

大河原美以　2004a　怒りをコントロールできない子の理解と援助　―教師と親のかかわり　金子書房

Rie, H. E. 1966 Depression in childhood: A survey of some pertinent contributions. Journal of the American

Academy of Child Psychiatry, 5, 653-685.

佐藤徳・安田朝子　1999 「抑圧」の認知精神病理学　――情緒システムの機能的解離と身体疾患との関連について――　心理学評論、42、438-465.

佐藤寛・石川信一・新井邦二郎・坂野雄二　2005　児童の抑うつ傾向と教師によって評価された学校場面における社会的スキルとの関連　カウンセリング研究、38、226-234.

佐藤寛・永作稔・上村佳代・石川満佐郁・本田真大・松田侑子・石川信一・坂野雄二・新井邦二郎　2006　一般児童における抑うつ症状の実態調査　児童青年精神医学とその近接領域、47、57-68.

相馬誠一　2005　がんばりすぎる子の心理（特集 勉強する意欲を育てる）児童心理、59、pp.765-768.

Stark, K. 1990 Childhood depression: School-based intervention. New York, Guilford Press.

庄子一子・林田和恵　2003 「いい子」傾向をもつ子どものself-controlと対人関係　教育相談研究、41、49-57.

武田（六角）洋子　2000　児童期抑うつの特徴に関する一考察: 攻撃性を手がかりに　発達心理学研究、11、1-11.

田村毅　1995　子どもの抑うつ状態の社会医学的視点　河合洋(編)　子どもの精神障害　こころの科学62　日本評論社　pp.30-37.

Weersing, V. R., & Brent, D. A 2006 Cognitive behavioral therapy for depression in youth. Child and adolescent psychiatric clinics of North America, 15, 939-957.

山口豊一・飯田順子・石隈利紀　2005　小学生の学校生活スキルに関する研究　――学校生活スキル尺度（小学生版）の開発――　学校心理学研究、5、49-58.

Over-adapted Tendency and Childhood Depression : A Study of Japanese Junior-high School Students

Kenichiro ISHIZU
(Student, Graduate School of Education, Tohoku University)
Hideo AMBO
(Assistant Professor, Graduate school of Education, Tohoku University)

Over-adaptation is one of the styles of adaptation. “Over” means “Too much” and “Adaptation” means “Achievement”, “Accomplishment” or “Perform well” in Japan. Over-adaptation Scale was constructed by 5-factors: “Self inhibition,” ”Solicitude for others,” “Living up to one’s expectation,” “Self doubt,” “Need for approval”. In the present study, we examined the prevalence of childhood depression symptoms with Depression Self-Rating Scale for Children(DSRS-C) and investigated the relationship between over-adapted tendency and childhood depression among junior-high-school students in Japan. Result suggested that 20.1% of students scored above the cutoff score of DSRS-C, 15.8% for male and 24.9% for female. About relationship between Childhood depression and over-adapted tendency, result showed all subscale of over-adaptation tendency scale related with childhood depression. On the other hand, we compared student’s school adjustment and their parent perceptions of that adjustment. Result indicated that there are some students, whose parents considered their children adjusted themselves well in the school, showed high depression score. Lastly, we discussed about disjunction of social adaptation and psychological adaptation in the light of over-adaptation and the difference between student’s perception of their school adjustment and that of their parents.

Keywords：over-adaptation, childhood depression, junior-high school students, school adjustment